

特集論文

絵画制作を通じた地域生活誌の創発
—心象図法による実践とその展開—

上田 洋平

Chronicling Community Life by Creating Pictures

Yohei UEDA

Center for Community Co-design, The University of Shiga Prefecture

In this paper, I would like to introduce a method that I originally developed, and which has increasingly been adopted. The purpose of this method is to support the rebirth and revitalization of the wisdom and creativity of local areas which once was lost. By asking elderly people in a given local community to recall, write down and talk about fragmentary memories involving their five senses—sensory memories they retain even if conscious recall is no longer possible—we can learn about life throughout the year in a local community as it was some 50 or 60 years ago. The process involves people of various social positions and generations drawing on a large folding screen through collaboration with each other. In addition to the drawing itself, people enjoy talking about the finished pictures on the screen, which lets them share and pass down stories from daily life in bygone eras. We call the folding screen made collaboratively by people “Shinsho-ezu”, meaning “mental imagery drawing”, and we call our method of making and using these drawings “Shinsho-zuhou”. Discovering the lifeblood and cultural essence of a local community, including the relationships between people as well as their relationship with nature and history, is something that can improve our lives in the future, and we want to make the most of it. I think that working to recover past memories is invaluable work that will contribute to our future. So far, this method is being adopted mainly in Shiga Prefecture.

Keywords: Mental imagery drawing, Old-fashioned picture screen

1. はじめに

「滋賀の暮らしを次世代につなぐ」ことに関わって、以下、十年余りに私が案出した手法とその展開について紹介する。独自の論を立てるにはまだ十分な材料がないので、実践現場からの実況報告である¹⁾。

具体的な手法の紹介に入る前に、背景として私自身の関心の所在について述べておく。手法そのものの成り立ちが提唱者である私自身のキャラクターに癒着するところ大で

あると指摘されていることもあり²⁾、この際私自身組上り上がって各位の批判と検証を俟ちたい。

2. 課題背景

私自身の専門は地域文化学であり、滋賀県内を主要な研究フィールドとしている。問題関心は煎じ詰めると大きく分けて次の二つである。

ひとつは地域に根ざした知と想像力の再生である。



図1 『近江八坂図』語り：八坂老人会有志、画：岡村康臣、2009年。琵琶湖岸の集落の暮らしを伝統的な絵巻物調に描いている。例えば「さァお立会い！ これからご覧頂きますのは滋賀県彦根市八坂町の昭和30年代のお話です…」という口上を皮切りに「絵解き」を始める。水路の田舟、田舟を使った農作業や遊び。春の田んぼを耕起すると「ゲンゲ汁が水路に染み出して小魚が酔うて浮いてくる」。そんな日常を描く。中でも「ハマ」の場面では人々にとって炊事場であり調理場であり洗濯場であり水汲み場であり漁場であり遊び場であり特産ラッキョウの生産地であり憩いの場でありさらには燃料確保の場であったという人と環境との関わりの豊かさを物語る。寺院と神社以外の集落内の個々の家は省略されている。

地域文化について地域の人々と語り合う際、なかば方便として「地域文化とはめぐみのめぐりあわせである」「文化とはめぐみをめぐりあわすまなざしといとなみである」と言っている。めぐみとは一に「自然のめぐみ」、つぎに「歴史（時間）」のめぐみ、そして「人のめぐみ」である。「人のめぐみ」とはそれぞれ固有の生活背景・経験や能力をもつ一人ひとりの人という意味と、人間性の本質である「想像力」（松沢、2011）のふたつを指している。

ただモノとしてのフナがおりコメがあり水や塩という「自然のめぐみ」があるだけではだめで、人間がそこに介入し、さらに半年あるいは2年という「時のめぐみ」が作用して、そのような「めぐみのめぐりあわせ」の結果として「フナズシ」という食文化は生み出される。このような「めぐみのめぐりあわせ」を可能にするのが「人のめぐみ」すなわち「想像力」である。そんなふう提唱している。

「想像力」は知恵・知識及びワザ・技術によって養育される。日々の生活実践や長年月にわたる自然環境との具体的な関わりのなかで培われた固有の「まなざし」と「いとなみ」が地域に固有の文化や生活様式を育む。生活様式の変化は地域の「めぐみ」に対する「まなざし」と「いとなみ」に影響を与える。知恵や知識はワザや技術によって限界づけられもするし解発されもする。知恵の裏付けのない技術は暴力になる。それらは相互に作用しあう。「まなざし」

がいとなみをつくり「いとなみ」が「まなざし」をつくる。

地域での暮らしの積み重ねによって磨かれた「まなざし」のもとに自然環境に働きかけそこから生存の持続に資する「めぐみ」を引き出し、あるいは手を加えて都合のよい空間に作り変えていく。その改変も行過ぎると人々の生存基盤そのものが破綻するが、そうした人々の「いとなみ」を自然・生き物の側も逆手にとって活用するという関係性が持続的に成り立っている場が里山であり里川であり里湖であり、「魚のゆりかご」と呼ばれる水田なのであろう。

そうした里山を成立させ、また里山的な関わりのあり方によって成り立っていた暮らしが激変した。つい数十年前まで「焚きもん」と呼ばれ「めぐみ」であった湖岸の流木はいまでは単に「ごみ」になった。流木は変わらずそこにあるが、われわれの「まなざし」と「いとなみ」が大きく変化した（上田、2013）。

「草根木皮（に支えられていた）。それが山の暮らしです³⁾」という暮らしから、「朝起きて便所を使う瞬間から、もう早やカネがいる時代⁴⁾」になった。そのために獲得すべき知やワザの種類も変わった。

地域の資源を活かした持続可能な暮らしの実現や地域活性化が叫ばれる時代にあって、地域の「めぐみ」に関する想像力が問われている。そのなかで、身近な地域の「自然のめぐみ」に向けるわれわれ一人ひとりの「まなざし」は

如何にあるか。日々の暮らしの文脈の中で地域の「自然のめぐみ」と関わる「いとなみ」の多様さ豊かさは如何にあるか。自然環境は繊細多様なディテールで成り立っている。その上に多様な地域文化が成り立つ。その繊細多様なディテールを認識し分けた上で関わりあうための感覚や力や術、地域に根ざした実践的な知を生み出す想像力をわれわれは忘れ失いつつあるのではないだろうか。

関心のふたつめは、あらたな時代の「在所」を構想することである。

人々が「在所」と呼ぶ一つひとつの集落や地域コミュニティは、かつて文字通り「在所」であった。

地域コミュニティは人々にとって生物（物理）的、社会的、歴史（時間）的生存とその持続のための共同体であった。生き物としてそこでただ食って寝るだけのためにも自然環境を中心とする地域のめぐみに関する実践的で確かな認識を駆使することなしには、人々はどの地でも生き抜くことはできなかった。

「自分はここで生まれ、この水を飲み、この畑で取れた作物やこの水辺でとれた魚を食べて大きくなり、元服し村人の仲間入りして各種の役割を担い、ここでこのように老いまもなくここで死ぬだろう。死んでからも盆正月は孫子に迎えられて共にひとときを過ごして帰り、やがて何十年かしたら先祖に混ぜてもらいその先は良く分からないが山にでも還るのであろう」と古老は語り、そのように地域に根ざし地域のコスモロジー（物語）を生きる人々にとって集落は、「からだ、こころ、たましい」すなわち物理的自然とのつながり、社会的他者とのつながり、歴史的時間とのつながりのどの側面から考えてもここがその根拠地であると素朴にも確かに信じられ生きられた「在所」だった。

集落がそうした場で無くなって久しい。人々の生命・生存の持続を担保するのは身近な地域の自然資源ではなく、集落内における人と人のつながりではなく、自分たちのあと孫子がそこに住み継いでいくとは限らない。

われわれのうち「純国産のからだ」を持つ人はもはや少なくわれわれは思いも寄らない遠方の土地自然に依存し負荷をかけつつグローバルなからだを生活している。「無縁社会」という言葉はマスメディアの作品だとしても、われわれの多くがそれに類する悩みを身近に経験している。われわれのこころはネット空間も含む広い社会においては互いに「百面相」でありながら近隣関係においては「のっぺらぼう」ということも普通である。そんなわれわれのたまし

いはまた、どんな伝統とつながっているのか。流行した歌に倣えば、われわれのたましいはついに「千の風になって」草葉の陰にもお墓にも、お山にもいないのである。

集落が一人ひとりにとっての「在所」であることの確かさが日に日に薄れ、われわれの「からだ、こころ、たましいは」いまやたいへん「所在」無い。

近代が終わるにしろ、超近代が始まるにしろ、成長型から成熟型に移行するにしろ、いずれにしろわれわれは時代の大きな転換点に立っている。地域コミュニティ、集落もその只中である。近代化という坂を上りつめ今やその「坂の上の雲のなか⁵⁾」を進みながら、かつて「離陸」したコミュニティへの、「着地」を試みようとしている（廣井、2009）。「所在無い」私にとっての「在所」探した。しかし、かつて離陸した元の「在所」には戻れない。来るべき時代には来るべき時代の「在所」を構想しなければならない。

地域に根ざした知と想像力を鍛え上げ、もって新たな時代の在所をつくる。これをライフワークと定めて地域に繰り出したが、未来の「在所」を構想するといっても、只今の一人ひとりの「在所」のイメージやリアリティが分裂・散逸し統合を欠くなかで、どのようにして人々とそれを語り合うか。そのような場も機会も断然少ないことは分かっていた。そうした場や機会どころか、いま暮らしている地域について、人々がともに語り合える過去（生活誌）そのものが人びとに共有されていないか、それそのものがない場合が多いのであった。

3. 「心象図法」

3.1 「心象図法」および「ふるさと絵屏風」とは

以上のような課題意識に関して、10年あまり以前に一つの手法を編み出した。地域に暮らす人々の生身の五感体験・生活体験に関する記憶をもとに、地域の様々な人や団体が参加協力し役割を担いながら、地域の生活誌を一枚の絵図として描き上げる。絵図の制作過程を通じて、また制作した絵図を様々なかたちで活用することを通して、地域とそこにある「めぐみ」を見つめ直し、地域の暮らしの文脈の中に現在の暮らしを改めて定位し直し、あるいは発見していくこの運動は、現在では滋賀県を中心に30余りの集落・地域で取り入れられ多様な展開を見せている。

この手法そしてその作品は、過去の記憶を保存・復元し伝えることだけでなく、また過去への回帰を唆すことではなく、過去の出来事に学ぶことで現在そして未来への想像力を養い、地域の文脈に根差した固有の文化を構築・再生

産することを促すことを目指す。またそれは地域の世代間を繋ぐコミュニケーションの道具あるいはメディアとなることを目指す。

一見すると過去の暮らしの記録、再現、継承であるが、この手法は地域に関わる個人一人ひとりの暮らしの経験と記憶を寄せ集めた記念碑としての地域誌を描くのではなく、そこに関わる一人ひとり個々の暮らしの記憶・物語を習合することが未来の地域誌そのものを創発するような、そのようないとなみであると考えている。

この一連の手法を「心象図法」と呼び、この過程で制作される絵図を「心象絵図」または「ふるさと絵屏風」と呼ぶ(図1、2、21、22、23、24、25)。「絵屏風」という通り、ほとんどすべての絵図は表装して屏風の形にしている。地域によっては「風景の記憶絵」という呼称を用いている⁶⁾。

「心象」という意味は、この絵図が人びとが五感体験を通じて印象深く記憶した事象を出発点としながら、しかも現在を生きる人々の意思や意図が込められている、そのような絵図として描かれており、現前する風景ではなく人々の心象風景とでも言えるものを描いているからである。

人々や地域の記憶はその出来事その人、あるいはその地域にとっての意味の強度によって濃淡を持っている。「心象絵図」はその強弱濃淡を絵画表現の中に反映させる。具体的には描きこむカットや場面の大小のメリハリとして、あるいは大胆にデフォルメして絵図の上に表現する。「心象絵図」はその土地環境に暮らす人びとが育んできた地域固有のコスモロジーを描こうとする。地域の「環世界」、意味の世界を描こうとする(ユクスキュル、1973)。一人ひとりの感覚や印象に根ざした生活世界を間主観的に描こうとする。

ただし「心象」と冠する名称をめぐっては命名時点で「心とは何か」ということに関する明確な理解があったわけではなく、厳密に考えれば、そもそも五感体験や身体性から出発するのであればそれに引き寄せたふさわしい名称があるのではないかと考えている。

しかしそうした検討とは別に、実際には地域ではその親しみ易さから「ふるさと絵屏風」と呼ばれることの方が多し。そこで本稿でもそれに準ずる。

「心象図法」は大まかに分けると1) 地域住民を対象にした五感体験アンケート、2) アンケートに基づく聞き取り、3) 以上を踏まえた絵図の制作、4) 制作した絵図の活用の4つの段階を踏んで展開する。このように段階を踏んで地域の生活誌を記録・保存し通時的に伝えるためのモノとし

ての資料・媒体を皆で作成していくのであるが、同時にそれを制作する過程すべてが、人びとにとって地域の暮らし及び自然や文化に関する知見を共時的に継承共有し育む機会になっている。

「心象図法」では、絵図に描かれる地域の生活誌の中身が重要なのは当然だが、結果としての絵図が目的的に大事なのではなく、それにも増して、絵図制作のプロセスや行為自体がより重要な意味を持つような手法である。その本質は、地域で経験された個々の事実が絵画の中に正しく記録・復元・保存されることにあるのではなく、地域に暮らしあるいは地域に関わる一人ひとりの記憶や経験を持ち寄って、その意味や確からしさを語り合い高め合いながら、まさにそのように共に語り合える過去を制作しようとする共同創造行為であること、そのように語り合える時と場の実現であることにある。手法の工程のところどころにそうした場や語りを触発する機会が組み込まれている。

「ふるさと絵屏風」は、そうした場を拓き行為を解発するための道具であるに過ぎない。その意味で、最終的な表現形態はどんな形でもよいとも言える。地域の生活誌をより客観的に記録し保存し継承するというのであれば写真やビデオを活用すればよい。ただ絵画には絵画にしかない可能性があり面白さがある。「構想を練り」「構図や視点を定め」「事物の配置を決め」「ハイライトや濃淡を工夫し」……といった絵画制作に固有の工程及び固有の制作的時間を地域の人々が共有できることもその一つである。写真より「似顔絵」の方がより対象の本質を伝える場合がある。

目的・作品・成果としての絵図や描かれた内容以上に、絵図を描くプロセス、人びとによる共同制作の行為とその時間、その場こそが大切なのだということは、これまでに絵図を制作し現に活用している地域のメンバー間で当初から共有し、その多くが、この手法を経験してみても実感としてしばしば述べるところでもある。

3.2 誰のいつごろの暮らしを描くか

「ふるさと絵屏風」に描かれるのは地域の生活誌であり、そこに生きる人々の生身の体験にもとづく地域に根ざした暮らしの記憶であって、遠い昔の英雄の事跡を描くものではない。「英雄の大河ドラマではなく、庶民の絵画ドラマである」などと言っている。

地域における生身の体験を描くといい、また地域の多くの人々はさしあたりそれを地域の昔の暮らしを描くものであると理解しているが、「昔とってどれくらい昔か」「ど

の昔か」ということが議論になる。高度経済成長期以前、昭和30年前後という区分を採用している。「大昔」ではなく「顔の見える」「手の届く昔」である。

地域の集落は自然環境に根ざしてそれぞれに個性的な暮らしと文化を育んできたのであったが、それは漸次画一化の道をたどっている。地域の人々はそうした地域の没個性化は感覚的には高度経済成長期を境に加速度的に展開したと認識している。そこで、高度経済成長期、昭和30年代以前かそれ以後かを目安としている。そこでこの時期の暮らしを身をもって体験し、記憶している高齢世代の子ども時代、青年時代の暮らしが対象として設定されることになる。ただし目安はあくまで目安である。また「生身の体験」とは言うが、実際には高齢世代の親や祖父母からの伝聞の範囲も含めた幅の出来事が描かれる。

もっと古い時代の伝説・伝承の類であっても、それが単なる知識としてだけでなく集落の人々にとって現に生きられている伝承である場合は積極的に取り込んでいる。高度経済成長以前、昭和30年代を中心としながら、「何年何月何日何時何分」を切り取るということにはさしあたりとらわれずに描く。人々はそのような記憶を生きているわけではない。層をなして積み重なる無数の記憶のフィルムを重ねたまま光に透かしてみたときに見える像。そんなものを描こうとしている。同じ線路上に蒸気機関車と電車が前後して描かれていても構わない。それによって多様な語りが拓かれるのであり、それが大事であり、そのような表現が可能であるから絵図という形式を採用しているのである。

3.3 「心象図法」実践の状況

既に完成し活用を進めている地域及び現在制作中の地域を合せて数えると、「心象図法」による「ふるさと絵屏風」制作活用事業に取り組んでいるのは、現在までに滋賀県内を中心とする32の地域・集落である（表1）。これは私自身が直接関わって指導助言したケースである。このほかに、私自身は直接指導していないが「心象図法」や「ふるさと絵屏風」に触発されて何らかの取り組みが始まり、絵図などの作品が制作された例もある⁷⁾。「心象図法」展開の概略は次の通りである。

2000年に大学の立地地元である彦根市八坂町の生活誌を描いた「心象八坂図」を制作した。この作品を当時の高島郡安曇川町（現高島市）関係者が知るにおよび2002年に同町「地域文化を活かしたまちづくり」のモデル事業としてこの手法が採用された。その後2006年までの間の9

件は、町・市及び県によるまちづくりのモデル事業として展開した。この間の取り組み主体は行政であり、集落はモデル事業の一対象地域として述語的に制作に協力参加した。

2006年になってこうした行政主導型モデル事業の成果を知った地域のNPO及び集落有志でつくるグループが、自ら事業主体となって取り組むことが始まった。以後現在まで基本的に「ふるさと絵屏風」の制作は地域・集落の人の発意と主体的な参加によって展開している。

制作推進体制は自治会やまちづくり協議会内に有志グループを組織して連絡しながら進める例が多い。規模の割合大きなプロジェクトチームや実行委員会を立ち上げて取り組むこともあり、この場合メンバー数は集落住民に学生や研究者、学芸員、NPO関係者、行政関係者、ボランティア的な自主参加者等が加わり50名近くなることもある⁸⁾。ほかに企業がCSRの一環として取り組む例、商工会の事業として取り組む例、福祉事業者が宅老所等で取り入れて実践する例等がある。「官民産学」のそれぞれ、またそれらが連携して、取り組み主体も多様に展開している。

絵図制作にかかる資金は、すべてを集落独自の財源によって進めている例はほとんどなく、多くは行政からのまちづくり事業補助金に申請するなどして確保している。外部からの補助金に加え、集落や地域内から寄付を集めて制作にかかる資金を確保する例もある。

「ふるさと絵屏風」の取り組みを知るきっかけはたまたま私の講演を聞いてという場合もあるが、それよりも近隣で制作された絵屏風自体やその活用の現場を見たことや、既に絵屏風を制作した集落の関係者からの口コミで知ったという例が多い。絵画の腕を見込まれて他地域の絵屏風制作に携わった人が、自らの地元の絵屏風も制作したくなり、有志グループを立ち上げ、まちづくり協議会等と連携し、自らプロジェクトを立ち上げて制作に至った例もある。

規模としては字単位での取り組み例が最も多く、次いでもう少し広域の小学校区の規模で、まちづくり協議会等が主体となって取り組む例が多い。近年はまちづくり協議会による取り組みが割合増えている。

実践のほとんどは滋賀県内の、かつての惣村の伝統を引き継ぐような村落で行われており、したがって農山漁村の暮らしと文化が描かれる場合が多い。古くからの街道沿いの暮らしを描くものに都市的な暮らしの匂いがするものはあるが、全くの大都会にある地域やニュータウンあるいは団地といった地域での実践例はまだない。

表1 心象図法の展開（2014年5月現在。事業年度欄「進行中」のものは2014年度中に完成予定）

番号	絵図名称	事業年度	対象地域	事業名	事業主体	事業タイプ	絵図制作者	備考
1	心象八坂図	2000	彦根市八坂町	修了制作	上田洋平+耳の会	独自研究	岡村康臣（大学院生）	
2	心象今在家図屏風	自2002	安曇川町今在家	地域文化を活かしたまちづくりモデル事業	安曇川町（当時）	町モデル事業	早藤典子（近隣住民）	
3	心象西万木図屏風	自2002	安曇川町西万木					
4	心象上小川図屏風	2004	安曇川町上小川					
5	ふるさと野口絵図屏風	自2004	マキノ町野口	ふるさと湖西再発見調査研究事業	滋賀県湖西地域振興局（当時）	県モデル事業	早藤典子（近隣住民）	
6	ふるさと桂図屏風		今津町桂					
7	ふるさと地子原図屏風	朽木村地子原						
8	ふるさと馬場絵図屏風	高島市安曇川町馬場						
9	ふるさと湊絵図屏風	高島市湊						
10	ふるさと木津絵図屏風	自2005	高島市新旭町木津	滋賀県湖西地域振興局→滋賀県高島県事務所		早藤典子（近隣住民）	山本功次、松原圭子（近隣住民・画家）	田中ちえこ（美術家・美術講師）
11	心象南市図屏風	自2006	高島市安曇川町南市	—	NPO法人どろんこ	NPO事業	山本功次（近隣住民・画家）	淡海NPO活動基金助成
12	沖田条里ふるさと絵屏風	自2006	高島市安曇川町沖田	—	沖田条里語り部会（区民有志）	集落事業	岡島宇平（地元住民）	区民が特技で作業奉仕 高島市自治会ステップアップ事業助成 滋賀県まるエコ大賞 高島市ふるさと自治大賞 淡海の川づくりフォーラムグランプリ
13	南比良ふるさと絵屏風	2008	大津市南比良	—	南比良ふるさと絵屏風づくりの会	集落事業（集落制作委員会）	山形歩、白瀬綾子（成安造形大学生）	区民から寄付を募る 大津市新パワーアップ事業助成
14	近江八坂図屏風	自2001	彦根市八坂町	—	耳の会	学生による地域貢献	岡村康臣（日本画家）	聞き取り時近江楽座助成 2001年版のリニューアル 文部科学省から一部助成
15	ふるさと大塚図（仮）	自2006	東近江市大塚町	—	人と自然を考える会 NPO法人蒲生野考現倶楽部	有志研究会とNPOによる事業	谷口隆雄（近隣住民）	
16	ふるさと沖島図（仮）	自2007	近江八幡市沖島町	—	NPO法人蒲生野考現倶楽部	NPO事業	藤山歩（成安造形大学）	立命館大学地域活性化ボランティア実習生も参加
17	渋川 風景の記憶絵	自2008	草津市渋川地区	草津市協働のまちづくり推進モデル事業「風景の記憶絵」制作プロジェクト	(財)草津市コミュニティ事業団（特活）おのみNPO政策ネットワーク 風景の記憶絵制作プロジェクト	官民協働の委員会方式ですすめる行政モデル事業	中村明雄（地元住民）他4名	委員会内の各部会による制作段階からの協働・展開が活発。地元小学校での出張授業や地元小学生の制作への参加も。紙園料亭での絵解き会なども。
18	ふるさと福堂絵図	自2009	東近江市福堂	—	グループホーム吉兵衛	グループホーム自主事業	里田清夫（近隣住民）	地元社協が支援。回想法としての効果も目指す。
19	ふるさと上丹生絵図	自2009	米原市上丹生	—	上丹生プロジェクトK	集落事業	寺田秀昭（地元住民）、森靖一郎（同）	
20	彦根下石寺絵図（仮）	自2009	彦根市下石寺町	—	滋賀県立大学	特別研究	西川礼華（日本画家）	
21	南船木絵屏風	自2010	高島市安曇川町南船木	絵屏風作成事業	南船木区自治会	集落事業	河本万里子（地元住民）	高島市自治会ステップアップ事業助成。
22	岩井温泉ふるさと絵図（仮）	自2010	鳥取県岩美町岩井温泉	—	岩井温泉自治会	集落事業	寺本勉（地元住民）	岩美町助成金
23	ふるさと上岡部絵図（仮）	自2010	彦根市上岡部町	—	上岡部老人会	老人会事業	未定	
24	日夏ふるさと絵図（仮）	自2011	彦根市日夏町	—	有志の会	有志の会事業	未定	
25	ふるさと沖野開拓絵図	自2011	東近江市沖野	—	東近江南部地区まちづくり協議会	まち協事業	谷口隆雄	
26	ふるさと多羅尾絵図（仮）	自2011	甲賀市多羅尾地区	—	多羅尾地域市民センター	市民センター事業	未定	
27	ふるさと矢倉風景の記憶絵	自2011	草津市矢倉地区	ふるさと矢倉風景の記憶絵プロジェクト	ふるさと矢倉風景の記憶絵プロジェクト	まち協有志事業	河崎凱三（地元住民）他2名	平成23年度・24年度 草津市ひとまち★キラリ助成活動。矢倉小学校空き教室で制作。
28	豊浦の郷絵図（仮）	自2012	近江八幡市安土町下豊浦地区	—	安土町商工会	商工会事業	清水文雄（地元住民）	
29	葉山の森絵図（仮）	自2012	神奈川県葉山町木古庭地区・上山口地区	大和ハウス工業 葉山の森プロジェクト	大和ハウス工業 東海市開発部/CSR部	企業CSR事業	関東学院大学学生	大和ハウス工業が所有する山林の整備・活用事業
30	ふるさと老蘇絵屏風	自2012	近江八幡市安土町老蘇地区	—	老蘇学区まちづくり協議会	まち協事業	井上修子（地元住民）	同時期に完成予定のコミュニティセンター玄関に掲げる予定
31	ふるさと草津風景の記憶絵（仮）	自2013	草津市草津地区	—	草津学区ひと・まちいきいき協議会	まち協事業	河崎凱三（近隣住民）	
32	甲賀市今郷・旧街道ふるさと絵図（仮）	自2013	甲賀市水口町今郷地区	—	今郷日会	集落有志事業	未定	

以下その各工程についてその中身と意味をもう少し詳しく紹介する。

4. 制作の実際1「五感体験アンケート」

4.1 設問項目・対象及び実施の意図

「心象図法」第1の手順として「五感体験アンケート」

を実施する。ここでは「目に浮かぶ風景」「耳に残る音」「鼻に甦る匂い」「手足にしみ込んだ暑さ冷たさや手触りなどの感触」「忘れられない味」の5つ、つまり、「目、耳、鼻、舌、肌」の五感それぞれに残る思い出について、自由記述式で回答を得る。

これまでのアンケートは絵図に描く内容及び年代の性質



図2 『南比良ふるさと絵屏風』制作：南比良ふるさと絵屏風づくりの会、2006年。山-里-湖の生態のつながりの中の人びとの暮らしを描く。人里と山との境界にシシガキが見える。湖に橋板が出ている。右から左に春夏秋冬の季節が進む様子が表現されている。沖には琵琶湖の観光船「玻璃丸」が浮かんでいる。琵琶湖をめぐるこの船は時計の針代わりに時刻を知らせた。（大津市南比良）

上ほとんどの場合地域の高齢者を対象に実施している。

アンケートの実施に先立って、絵図制作事業のキックオフとして、地域内で住民向けのレクチャーを行う。レクチャーと言っても、既存他地域の「ふるさと絵屏風」を紹介する程度である。他地域の絵図でも共通する体験も多い。絵解きに触発されて、めいめいの思い出話が展開する。「まさにそのような話を盛り込んでこのような絵図をつくっていくのである」ということを示す。キックオフの段階でそのゴールに展開するはずの状況を共に体験する。絵図という具体的な形を持つ目的物があることによって当事者が「これから回答する内容がそのような形で反映されるのだな」という具体的なイメージを持つことができる。「ふるさと絵屏風を描いて暮らしを残して伝えると聞いても何のことかさっぱりわからなかったが、こういうことか」というふうに地域での理解が進み、参加意欲が高まるのもこの場でのことである。

アンケートの質問項目として「五感体験」を採用するわけは、「教科書に載っていない（載らない）」と表現されるような、形式知になる前の、また形式知に基づく解釈や評価を経るまえの、身体的、直感的な地域に関する情報を得たい、よりそれに近づきたいためである。説明的な科学知よりも、実践的な「具体の科学」や「暗黙知」の手がかりを得たい。

ただ実際には質問文の中にあえて「なつかしい」という文言を使用している時点で一定の価値判断のバイアスがかかっている。アンケートへの回答しやすさのためにこうした文言を採用している。「五感」という概念についても、

人間の感覚については実際には例えば「内臓感覚」や「第六感」等もっと精緻なカテゴリー分けがありうるが、一般的な理解として「五感」を採用している。

「五感体験アンケート」によって、具体的には「田舟で鋤、時には牛を運んでいた」「田んぼで皆で食べるミソジャがとても美味しかった」「雲が低くなり雨が近づいてくると遠くの汽車の汽笛が聞こえてきた」「九月には産卵のため押し寄せた鮎が浜に打ち上げられて村全体が魚くさくなった」「川のうろに手を差し入れて魚を手づかみした、あのときの魚の感触」「手作業で田刈りをしたときに首の周りがはしかかった」等、地域の暮らしの記憶の断片が何百も集まってくる。

4.2 「身識」の提唱

地域での生身の体験に根ざした知や認識をこの手法では「知識」に対して「身識」と呼んでいる。ただしこれはなんら科学的定義もなく検証も経ない独自の用語すなわち方便である。「尋常小学校しか出ていない私が大学の先生にお教えできるようなことはなにもありません」という言葉は、地域に関する「知識」を念頭に発せられるのであって、「五感体験アンケート」はこうした「知識」の源流、普段は意識しないような領域に眠っている地域の認識に迫ることを目指す試みである。

地域に関する知は学校や教科書の中にいつでも持ち運び取り出し可能な形で保存されているものだけではなく、地域で生きることを通じて一人ひとりの身体筋肉細胞の中にしみ込むように記憶蓄積された知があり、あるいはその土地その場その状況に立つときにはじめて起動する類の知あるいは「まなざし」と「いとなみ」の系があるはずで、地域とそこに根ざした暮らしを再構築するときそれをこそ大事にしたい。しかし地域の人たち自身が「知識」ということを念頭に、あるいはそれを盾にとって自らの経験や暮らしをあまりに卑下したり謙遜する場面に多く出会う。それを打破したくもあり、そのための方便として「身識」という言葉を使っている。方便であるが例えば「先生もこのごろ身識がついて肥持ちの格好が板についてきたな。けどまだまだそれでは日が暮れてしまうな」などと年寄りが活用していることからすると、すこしは有効のようである。

4.3 五感体験マップ

五感体験アンケートを実施して集ったデータは、KJ法を応用して整理する（川喜田、1986）。アンケート結果を

すべてカード化し、それぞれの項目の類縁関係に従ってくり分けて島をつくり、島同士の相関関係を考えながらマッピングする。このようにして分類配置することで、地域の暮らしの骨格を把握できる見取り図ができる。例えばひと言「ミソジャ」と記されるような回答について、まったく同じ文言がいくつもある場合であってもすべて一枚ずつカード化して整理していく。これによってより視覚的に直感的に地域の特徴を把握できるだけでなく、そこには地域の人びとの集合的記憶の傾向や強度、地域にとっての意味の重みも表現されることになる。

このような作業を経て作成したものを「五感体験マンダラ」とか「五感体験マップ」と呼んでいる。その形から「おもいで花火」と名づけたものもある(図3,4,5,6)。

地域の実際の地理的位置関係を念頭に、あるいは実際に地図を台紙にして、その上に五感体験アンケートの回答カードを配置したものが「五感体験マップ」である。地図的な位置関係と関わりなく、季節や作業など任意のキー

ワードで、あるいはくくる論理そのものを回答群のなかに見つけ出してくり分けて並べたものが「五感体験マンダラ」や「おもいで花火」である。

こうしたマップやマンダラづくりは、老若ともに取り組むことができるワークショップとして企画し実施する機会が多い。この際出来上がる「五感体験マンダラ」等自体独自の作品となり、様々に活用することもできる。

5. 聞き取り

第2段階は聞き取りである。

聞き取りは地域の老人会に類する組織の協力のもと進める場合が多い。話者入れ替えを行って多数の人に広く話を聞く場合と、昔のことをよく覚えていて話し好きなメンバーが選抜されて、同一メンバーから何度かに分けて聞く

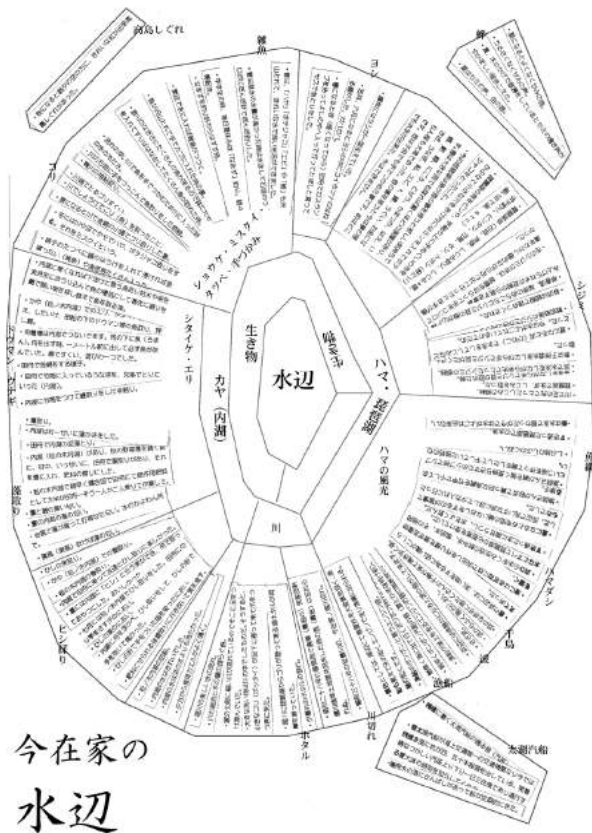


図3 五感体験マンダラ。「水辺」というキーワードにより集合した回答カードを並べた。人と水辺及び生き物との豊かで細やかな関わりが直感的に分かる。(2002年、高島市今在家)

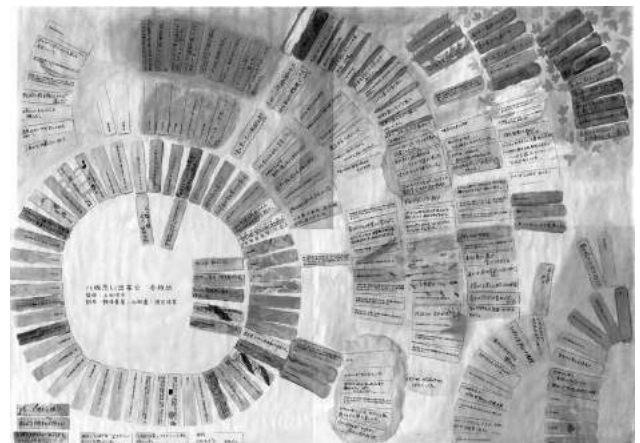


図4 五感体験マンダラ。形状から「思い出花火」と名づけた。左の円は農作業の一年。(2005年、彦根市八坂町)



図5 五感体験マップ。見出しは「マンダラ」となっているが、性格としては五感体験マップである。くり方も含めて多くのことを示唆する。「混沌をして語らしめる(川喜田、前掲)」。(2013年、近江八幡市安土町老蘇地区)

場合とがある。どちらの場合にもテーブル毎の話者は6～7人が適当である。聞き取りは一回あたり2時間程度を限度として概ね5回程度行う。集中して実施する5回程度のうちに拾いきれないことも当然出て来るので、絵画制作の過程で必要が生じたときにはその都度適当なメンバーに対して聞き取りを実施する（図7）。

聞き取りでは五感体験アンケートの回答そのままを取り上げて順次質問していく。五感体験アンケートによって集めた記憶のデータ、それをもとに作成した「五感体験マップ」や「五感体験マンガラ」が、この聞き取りの際の文字通りの見取り図になる。「この集落では“ミソジャ”に関する回答が五感体験マップの大きな部分を占めているので、まずはこの“島”から聞いて行こう」というような見通しを立てるといふ具合である。このような作業も特に高度な専門的知識を要するものではなく、この地域・集落について何を聞くべきかということ自体、住民の五感体験のデータが指し示している。ただし五感体験アンケートの回答が地域の出来事すべてを網羅しているわけではないので、併せて「地域の概要・生業」「年中行事」「冠婚葬祭や生老病死」「地水火風」「家畜育兒・学校子ども・戦争」等のテーマ項目も併用して聞き漏らしがないかをチェックしながら進める。ちなみに「地水火風」とは地域の土地の性質、水や燃料はどこからどのように確保したか、気候気象はどうだったかということである。

このような見取り図とチェック項目を聞き手と語り手とが共有した上で、その見取り図を参照しながら、古老、年長者から地域の暮らしの物語を聞き取り、記録する。

「アンケートの中に“ミソジャ”というのがあるけれど、これは何ですか？」とカードを読み上げて問いかけると、それを糸口に「かつては一帯が水郷とも言えるような縦横に水路の走る地域であり移動や運搬には田舟を利用していた。そのために昼飯も家に帰らず田んぼでとる。水路の端に柳のような木が生えているとその根っこは水で洗われてひげのように水中に揺らいでいる。そこに当時はたくさんいたモロコなどの魚が産卵しにくるので持参しておいたサデアミでそれを捉え、一方これも持参してある薬缶で水路の水を汲んで藁を燃して火にかけ湯を沸かしてそこに自家製の味噌を溶く、そこへ先ほど捕まえた小魚をちょっとあぶって放り込んで食べた。これをミソジャと言ってあの味は忘れられない。その時分にいた魚といえば……⁹⁾」というふうな、一つの五感体験アンケートの回答から、関連する物事が次々に語り出される。そこへ「農

繁期には結いといって皆で助け合いをした」とか“田んぼでみんなで輪になってお昼ご飯を食べた”という回答があるけれど、それも関係あるんですか？」という風に別の回答カードを「話の接ぎ穂」として投入していく。このようにして個々の体験に関する記述を厚くし、体験相互の関係を明らかにしながら地域の暮らしの物語を聞き取り記録する。

こうした作業は聞き取り調査の技法に関する専門的なトレーニングや前提知識がなくとも可能であり、小学校高学年くらいなら子どもたちにもできる。子どもたちがアンケートの内容を読み上げて質問するのに対して古老が答えていくという、ある種のゲーム的要素があるので、子どもたちを巻き込むきっかけにもなる。

聞き取りの場に参加し、数人集まって話をする中で、場に触発されて記憶がよみがえることがあり、「家族にも話したことがないようなこと」が語られることも多い。



図6 五感体験マップ。「堀・内湖・舟」のくくりのうち右端の一番大きい“島”が「ミソジャ」。それだけ印象深いということ。聞き取りの見取り図になる。（守山市幸津川町）



図7 聞き取り調査（大津市南比良）

聞き取りの音声はレコーダーに記録し、聞き取りの結果は整理してテキストとして聞き書き集等にまとめる。聞き書き集は、後に完成した絵図を「絵解き」して活用する際の台本にもなる。音声は音声でまた別の活用法がある。

6. 絵図の制作

6.1 絵師

3段階目は「絵屏風づくり」である。

アンケート及び聞き取りの結果採集された出来事やエピソードを総合して絵画として表現していくのだが、この過程では、絵図の構想の検討、絵図に描き込む項目・内容の選択、絵の構図の検討等を皆で相談し議論しながら共同作業として進めていく。このように皆で議論しながら、一人ひとりの生身の体験とその記憶を素材とし、志向性を持って、統合的に一つの全体像として「構成」していくこの段階が「心象図法」の核心であると言える。そのためにも重要な役割を担うのは実際に絵を描く人材である。「絵師」と呼んでいる。原則的には地域に在住の、多少とも絵の心得のある人の中から探す。美大を出た主婦、中学校の現役美術教師、絵手紙作家などである。絵師はあまり画家然とした人でない方がよい。「私の絵」を描くのではなく、皆の意見を聞いて描くことのできる人でなければならない。プロかアマチュアかはさして重要ではない。絵師もアンケートの段階から参加する。

地元人がいなければ近隣から、それでもいなければ例えば近隣美術大学の学生の力を借りる。地域と無縁のしかも二十歳そこそこの若者が描くとなるとまた独特の苦勞が伴う。こんなことまで説明しなければ伝わらないのかというところまで丁寧に教えなければならぬ。しかしだからこそ年配者は自分たちにとって自明なことを何とか伝えようと真剣に努力するし、若者は地域の理解を深めていく。

ある集落のメンバーは「自分では当たり前を受け継いで来た物事も、今はそれを伝えるのにこんなに苦勞するのだということを思い知った。自分のしてきたことや地域での暮らしについて、こんなに真剣に伝えようと努力したこともなかった¹⁰⁾」と述べた。地域の暮らしや文化の伝承に関する、地域の人びとによるこのような自覚に意義がある。

これまでの例では絵師は1人の場合も多いが、複数の場合もある。複数の場合は例えば1人が地となる絵地図を、1人が建物を、1人が人物をそれぞれ描く、というように、分業態勢をとることが多い。集落で建築業を営む人がもともと持っている職業上の技量を発揮して絵図制作に参画し

たりする。絵師だけでなく、記録係、資料収集係、活用係など役割分担が必要な多様な作業がある。「自分は表具屋なので表装で作業奉仕する」というような人が現れる。それぞれの職歴や得意を活かして分担しながら進める。そうした分担が可能だけ、今は地域の中に多様な職種や履歴を持つ人たちが居る。それは完成後の活用の場面でも活きる。

6.2 絵にすることとその選択の問題

アンケート及び聞き取りを通じて、絵の素材となるエピソードは何百と集まる。このすべてを描き込むことも不可能ではないが、実際には議論しつつ取捨選択を行いリストアップを行う。ただし、「地水火風」「春夏秋冬」「生老病死」「冠婚葬祭」については基本的な構成要素として取り上げて描くことを提案している。どのような気候風土のどのような地理的条件の上に、どのように季節は推移し、どのような生業に生き、水や燃料、そして食料といった資源をどこから確保し、それはどこに行くのか。そこで人々はどのように生まれ、育ち、死んでいくのか、どんな祭りや行事があるのか。それを物語る要素は描き込むことを薦めている。その後は「この地域・集落らしさを伝えるにはどのような場面、どのようなエピソードを描き込むべきか」等議論しリストアップしていく。

アンケート及び聞き取りを踏まえた絵図の内容の取捨選択は、実際には非常にデリケートな問題をはらんでいる。「ふるさと絵屏風」は、五感体験アンケートの実施時点で「なつかしさ」というふるいにかけられて採集される事象を素材としており、これらは人々にとって概ね肯定的な印象のものであることが多い。否定し去りたいような事象は挙がってこず、否定的なものでも「当時はつらかったが今となってはなつかしい」という範囲のものが挙がる。このことをどう評価するかという問題がある。

アンケートや聞き取りでは一定以上の回答があり言及があるにもかかわらず、例えば「肥持ちの姿はみっともない」というような潜在的な評価、あるいは「あたりまえ過ぎてあえて描くようなことではない」という通念によって、意識的あるいは無意識的に素通りされてリストから漏れるようなものもある。また差別や人権に関わる事象をどう扱うのか。それらのことはまだ十分に検討されていない。

そういうときには専門的あるいは外部者の見地から指導助言することもできるし必要に応じて行すが、「心象図法」ではそうした議論こそ地域の人々と共に行いたい。制作に

向けた選択の過程を通じて地域とそこに生きる人々の潜在的な意思についても議論を通じて共に思いを馳せ地域の自覚の機会にしたいと考えている。事例が積み重なれば「一般にどういったことが描かれない傾向があるか」ということをリストアップして地域の人々と共有し分析することも可能になろう。その上での採否は地域の人々の判断にまかせ、その判断について自覚的であること、判断の理由や意味を説明し共有できることを求めることになる。

6.3 「描かれていない」という表現及び数々の隠喩

「語られたが描かれなかったもの」がある場合、そのものは「描かれていない」という形で可視化される。絵画という表現形態を採ることによって、それがよりはっきりする。五感体験マップや聞き書き集等と絵図を相互に参照することでそれは明らかになる。また実際絵解きの場面では、「描かれていない」ということを出発点として語りが起動する場面も多い。地域の事象すべてを完全に網羅して描くことはできず、それでも「エイ、ヤッ」と一旦一枚の全体として描き上げてみることに、そうした逆説的な意義もある。「描きつくせないこと」と「語りつくせないこと」が絵図の上で出会う。

また聞き取りではよく性愛に関する話や猥談も頻繁に出てくるが、それらはあからさまな形では表現されない。「男女二人が乗った田舟がこれからヨシの茂みの中に漕ぎ入ろうとしている」場面を描くことで隠喩的に採用され表現されたりする。

また先述のとおり「なつかしい」好ましい経験や記憶が画題の中心になる場合も多いので、それを乗り越えるために、そうした絵図と対になる“裏心象絵図”か“地獄絵図”をつくって、上級者だけに開帳するようにしようかと議論していた集落もある¹¹⁾。いずれそうした絵図が出現するかもしれない。

6.4 資料の収集と作成

描き込む事物や場面について合意できたら、リストに従ってそれぞれの事物を一つ一つカット画として、通常ははがき大の用紙に描いてカード化し描き溜めていく（図8）。

並行して、リストに従って必要な資料を手分けして集める。住民に呼びかけて古写真を集めたり、学校や博物館に収蔵されている民具を確認したり、また図書資料の収集にも努める。古老が自らイラストを描いて示してくれる場合

もある。そうして集めた資料を参考にしながらカットを描いていく。こうした資料集めが発展して絵図完成前から小学校の郷土学習の授業に参加する例もある¹²⁾。その他、資料収集を兼ねてイベントとしてのまち歩きを企画実施する場合もある。

絵図化のための資料収集に関してはこのほか、既存他地域のふるさと絵屏風に描かれている事物や場面を参照し活用する例が、この数年では増えてきており、実際、それぞれの絵図から地域差の少ない事物や場面を抜き出して集めた「ふるさと絵屏風カット集」とでも言えるようなものをつくり活用している例もある。



図8 カット画。画：清水文雄（近江八幡市安土町下豊浦）

7. 構想を練り構図を決める

一つ一つのエピソードや場面を描いたカットづくりと並行して絵図全体の構想を練り構図を組み立てる。画面のどこに山や川や湖を配置し、どの向きから見た絵図にするか等、構図を議論し決定する作業は極めて重要である。

まず基本となる絵地図について、山や川や湖沼あるいは道などのおおまかな配置と画面上での比率を検討し構図を決める。ふつうの地図なら北を上とするというような決まりがあるが、ふるさと絵屏風の場合は、どちらを上と捉えどちらを下と捉えるか、どちらが前でどちらが後ろなのか、あるいはどこからどこまでの範囲を描くか、縦長なのか横長なのかも含めて、集落の人びとに固有の方向感覚、あるいはこう言ってよければ地域・集落固有のコスモロジーに基づいて決めていく。滋賀の琵琶湖岸の場合、琵琶湖を画面の上下左右のどちらに描くかは、集落によって違っている。画面の端がすなわち「他界」との境に見立てられる例もある。上下あるいは前後左右の位置関係は正しくとりながら、縮尺等については大胆にデフォルメする。そこに載

るべきエピソードの多寡や人々にとっての関わりや記憶の強度に応じてそれは決まる。

地となる絵地図の構図が決まれば、次に一つ一つのエピソードやカットの配置場所を検討する。カード化したカット画を絵地図の上に並べ、また並べ替えることを繰り返しながら議論する。必ずその場所に描かれるのでなければならぬ物や場面、ランドマーク等をまず絵地図上に配置する。その後で、より自由度の高い物を画面上にまさに「位置づけ」ていく。絵図の中で季節の流れ、人のいとなみの流れ、時代の流れ等をどう表現するか、完成後どのように絵解きできるかを考えて配置を工夫する。これまでの例では耕起から刈り取りまでの農作業の場面の並べ方によって集落の一年間の時間の流れを表現しているものが多い。これは難解なパズルを組み立てるようで非常に骨の折れる作業である。しかし、人々にとってはもっとも創造的にも感じられる作業でもある。

絵図の構想を練り構成を考える際に「たくさんの家の姿をどのように描くか」、「結局どれくらいの年代幅の出来事を描くか」といったことは必ず議論に上る。

家や家並みについては、一軒一軒の配置や大きさを正確に反映して描くことは難しく、また絵図の趣旨から、それぞれの家をそこに探すのが目的でもない。それは航空写真等で事足りる。そこで、誰もが記憶している旧家や神社仏閣や建造物以外の一般の家については、家並み全体の特徴や屋根（瓦葺か草葺か）の分布状況等に配慮しながら、大胆に省略して描くという結論に至ることが多い。ただし、街道筋等道に面する一軒一軒の個性を表現することが重要な地域ではこの限りではない。

いつ頃の出来事を描くかについては、先述の通り、高度経済成長以前、昭和三十年代までの時代における地域の様相を描くこととしているが、何年何月何日という時点にあまりこだわらず、幅を持たせる。

こんな例もある。ある集落ではかつての田んぼが現在団地やニュータウンになっており、人口ではむしろ新興住宅地の方が旧集落より多い。そこに生まれ育った子どもたちも当然多く、その子たちにとっては新興住宅地といえどもふるさとである。しかし絵屏風の年代設定に厳密に従うとその団地を描くことができない。すると完成した絵図を見た子供たちが悲しがるのではないか。このような議論の中で、絵図の構図の中で空白となっている部分に、雲の中やうっすらと色付けした円の中に描くことによって、時代の隔たりを表現しながら、新興住宅地の様子も取り込むとい

うアイデアが取入れられた。

あるいは、今の風景しか知らない子供たちがうまく絵図の中に入り込めるように、位置関係の標識となる新幹線を画面下端に描き込むことにした例もある。子供たちは「新幹線を辿って昔の集落にタイムスリップする」のである。

こうして構想図を検討する中で、例えば「この集落ではあたらしい時代の流れは常にこの道のこの方向から入ってきたのだな」というような、いわゆる「風水」的に抽象化された風土への認識が生まれることもある。

こうして絵地図の上に集落の空間構造だけでなく時間軸をも組み込み何百もの場面や物事をその相応しい場所に位置づけていく。しかもそこには大勢の人の集合的記憶だけでなく、個人的ではあるけれどもその地域の特性を象徴するような出来事をも盛り込んでいく。このような作業を何度か重ね、構図及び物事の配置や事物間の関係、出来事の流れ等を描きこんだ「構想図」をつくりあげる（図9、10、11）。

8. 絵屏風制作を通じた「あるものさがし」

「昔の地域の姿を正しく記録・再現し絵として保存する」のではなく「絵図を使って地域の暮らしを語り、伝え、共有する」というふるさと絵屏風の目的を共有しながら、表現について議論し、それぞれに工夫しながら、絵の中のドラマを構成的に創造していく。平面である画面上に時間と空間だけでない様々な人々の様々な角度からの視点を表現する。その意味で「3D」を超える「5D」あるいは「10D」絵画にも喩えられ、そのデフォルメされた表現はまるで「キュビズム絵画」である。

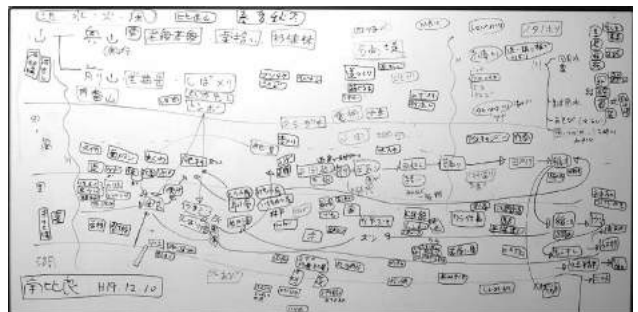


図9 作成途中の構想図。様々な物事の配置とそれぞれの関係を図示する過程で地域における人と自然との関わり、人と人との関わり等を見つめ直す。「これはいま盛んに言われている循環型の暮らし。昔わが村ではそれに近いことを実現していたのだ。これだけのものがあつたら生き延びられるな」という趣旨の感想が出たのは、構想を検討していた時だ。(2007年、大津市南比良)

それだけに、構想図をつくる行程にはちょっとした無理も伴う。その「無理」の自覚からも地域に向ける意識や気付きは育まれる。そうした無理の自覚を持ちながらも、個々の正しさに必要以上にこだわるのではなく、一定の確からしさを確保できたなら、一旦エイヤツとひとつの全体として表現してみることが大事であると提唱している。

一人ひとりの地域での経験の記憶を五感という切り口でいったん分解し、それら記憶の端々を糸口にして土地に編みこまれたエピソードを解きほぐした上で、今度はそれらを集約、統合し、一枚の画面上に一つの全体として構成していく。この作業を共同で行うことにより、人びとは人と自然との関わり、人と人との関わり、人と歴史との関わりとそれら関わり相互の関わりの中に地域の暮らしが成り立つ様を俯瞰的な視点から再認識する。「あたりまえ」のように思い行ってきた物事も、土地自然、時、人それぞれのいとなみとそのかかわりの理にしたがってその時その場に現成していたのだということに気付く。

はじめ「私の村には大きなお寺も文化財も立派な祭りもない。珍しい特産物もないし、なーんにもない」と言っていたあるメンバーが、皆でつくった「構想図」をなぞりながら「飲み水は山から豊かに流れてきた、コメは田でとれる、山で燃料を確保してメシも炊けるし風呂も沸かせる。その灰は田んぼの畦豆の肥料に使う。豆の殻はまた燃料する…。これはいわゆる循環型の暮らしであった。なーんにもないと言っていたが、ここでなら生き延びられるな¹³⁾」と語っていた。絵屏風づくりは地元学が提唱するいわゆる「ないものねだりから、あるものさがしへ」の実践として、暮らしと文化の再評価の機会になる（2008、吉本ほか）。



図10 構想図制作。二十歳代の学生に伝える。小道の曲がり方にも意味と理由がある。（大津市南比良）。

9. 下絵の制作と確認

地域での何度にもわたる議論と工夫を経て「構想図」が出来上がったなら、それをもとに下絵を描く。下絵の段階でまた複数回にわたり古老や地域住民にこれを見せて内容の確認を行う（図12）。構図ができた段階、下絵ができた段階、本図として彩色する前の段階の最低3回は広く呼びかけて確認会を行う。具体的な形が示されるので、ここで様々な意見が出てくる。こうした手続きを経て下絵の内容が決まれば、本図の制作にかかる。

10. 「ふるさと絵屏風」の完成と披露

本図の制作に漕ぎつければ、むしろ手を動かす作業が主となるので、進み方は早い（図13）。

絵図の大きさは高さ幅180cm×高さ90cmの2つ折りといった小型のものから、幅250cm以上×高さ約180cm4つ折りの大型のものまである。



図11 構想図。大胆にデフォルメされた画面に集落のコスモロジーが表現されている。（近江八幡市安土町老蘇）



図12 下絵の確認会（近江八幡市安土町老蘇）

絵図の制作は絵師の自宅で行う場合もあるが、画面が大きいこともあり、ゆったりと空間をとることができる地域の公民館施設やコミュニティ・スペース等、地域のまちづくり拠点の一室を使って半公開の状態で行うことが多い。最近では小学校の空き教室がそのために提供され、学校空間の中で絵図作りを進めている例がある（図14）。一部児童が画面の色塗りに参加した例もある。

地域の大勢の人びとの記憶の語りを集約し、制作の過程を通じて様々な作品や資料及びワークショップやイベントを派生させながら、最終的に一枚の絵図が完成する。「百聞を一見にする」と言っている。補助金の都合で1年間で完成させる例もあるが、多くは2年ほどかけて完成させる。

完成した絵図はその後様々な形で活用できるようにスキャンしてデジタルデータ化する。スキャンしたデータを用いて TENT 地や布等に印刷した複製画をつくっておく。

これは地域の小学校や公共スペースに寄贈・展示したり、学校での郷土学習等に気軽に使うためである。その後表装に出して絵屏風に仕立てる。絵屏風にするのは壁面の無い場所でもそれを持ち出して活用できるようにするためである。

完成した絵図を披露する「完成披露会」を行う。公民館や小学校の体育館等で時には首長を含む来賓を招き「除幕式」なども交えて行われる。絵屏風に示された場面を再現したり、当時の食べ物を再現して土産にしたりする（図15）。

絵屏風は地域の集会所などに保管・展示される。まちづくり協議会等の制作になる絵屏風では地域のコミュニティセンターや、ある地域ではそれ専用の小部屋を新たに設えて常設展示している例もある¹⁴⁾。「長く伝えたい」ということで、絵屏風の実物は集落の集会等の時以外の普段はしまっておき、代わりに複製を展示活用している場合も多い。



図13 絵師。芸大志望の高校生と絵手紙画家のコンビ。(2014年、近江八幡市安土町下豊浦)



図15 完成披露会（2008年、大津市南比良）



図14 絵図の制作。小学校空き教室での制作途中に児童が見学に訪れた。(2012年、草津市矢倉)



図16 完成披露会（2008年、大津市南比良）



図 17 『ふるさと沖野開拓絵図』制作：東近江市南部地区まちづくり協議会、2012年。戦後の開拓村の歴史を描く。当初からの流れを1世存命のうちに残したいというのが動機。画面左上を開拓開始時とし、右下に向かって時代が進み開拓が成っていく。バラックから2階建てへ。石原から田園へ。最後は皆で祭の風景。一方画面右上から左下にかけては1年間の季節の巡りが表現されている。寒い冬から爽やかな秋へ。時代の流れと季節の流れが絶妙に表現された苦心の「Xの構図」。「つらかったには違いないが、懸命に生きようとしていたことに値打ちがあると気付いた」と制作チームリーダーは語る。（東近江市沖野）

11. 「ふるさと絵屏風」の活用

絵屏風づくり最後の行程は「活用」である。

絵屏風を見た人の多く、特に年寄りたちは、絵図に触発される形で、絵図の各場面を指さしながら、新たに自分たちの記憶を語り出す。これを捉えて伝承の機会とすべく年寄りたちを「語り部」として「絵解き会」を開催する。

絵の中のそれぞれの場面は子供や若者に対しては「これは何？」という問いを触発する「スイッチ」であり、高齢者にとっては同じ絵を指さしながら「これはなあ…」という語りを起動する「スイッチ」である。同じ絵の中に問いと答えが同居しており、このような絵図を仲立ちにして、世代間の語り合いを促し記憶の継承を図るのである（図18、19、20）。

例えば、絵の中に集落境の橋を今しも渡ろうとする娘の姿が描かれている。お婆さんたちが一見何気ないその場面を見て顔を見合わせて笑い合う。「正月など限られた時期の里帰りに姑のいる嫁ぎ先から親元へ東の間帰れるのが嬉しく、その時は〇〇の橋を渡るとフッと肩の荷が下りたよ

うになった（逆に戻るときは橋に差し掛かると背筋が伸びた）」という当時の若い嫁たちの経験を象徴している。同じ絵を見ながら共にそんな時代を生きてきたということを確認めあう。そしてそれぞれの経験のヴァリエーションが語り解かれていく。皆が同じ場でそれに立ち会う。

「絵解き」の絡む活用法を列举すると次のようなものがある。小学校での「絵解き授業」は多くの地域で実施例がある。年寄りが「語り部」として小学校に出向き、絵図の内容を解いてみせる。また公民館や集会所で住民による絵解きを聞いてから絵に描かれた現場を歩くエコツアーのプログラムになっている地域も幾つかある。子や孫が帰省する盆の時期に合わせて絵解きと絡めた行事を開催している集落もある（私はその行事を「絵の盆」と呼んでいる）。

絵図だけでなく、絵の内容をより分かりやすくあるいは詳しく伝えるために、聞き書き集や主要場面のカット集等、絵図制作にあたって収集あるいは作成した資料類を活用する。デジタル化した絵図をITを駆使して活用することもできる。パソコン画面上の絵図のある部分を選択すると、その部分が拡大されその場面に関する説明が表示されるだけでなく、その場面にまつわる古老の語りや音声またはビデオで流れる。そんなソフトを開発した例もある¹⁵⁾。

また絵図の場面に関連する「紙芝居」を別に作り、絵解きと組み合わせたり¹⁶⁾、絵図の場面を切り取り絵札とし、その絵に対応した読み札をつくって「カルタ」を制作した集落もある¹⁷⁾。そのカルタを使って正月などに子供会等の行事で絵解きと併せて活用している。カルタの絵札を一人につき一枚ずつ手渡して「絵の中にあるから探しておいで」というふうには、絵屏風への導入に活用できる。また聞き取りや絵図の内容に基づく「集落検定」を制作した例もある。これは観光客や絵図の見学者、まち歩きイベントへの参加者に対して実施するもので、絵屏風の絵解きとその後のまち歩きをしたあとで活用する。つまり「ふるさと絵屏風」一枚の制作から次々と新たな制作が展開し、工夫を凝らしたツールが産み出されている（図21、22）。

絵解きはもとより絵図制作の過程を通じて高齢者の語りや会話が活発化することから、いわゆる「回想法」での活用など、高齢者の健康や福祉の面での効果が期待されて、福祉事業の中でも地域と協力した認知症・介護予防への応用の試みがある¹⁸⁾。環境関係の分野でも、地球温暖化適応策に関わる取り組みの一環として「心象図法」が応用されている¹⁹⁾。また、企業のCSR事業として展開している地域もある²⁰⁾。持続可能な地域社会像とその実現に向け



図 18 絵解き会 (2008 年、高島市沖田)



図 19 絵解き会 (2009 年、大津市南比良)



図 20 絵解き会 (2005 年、高島市野口)。「画面を指さして語る」所作が必ず見られる。



図 21 上丹生ふるさとカルタ。(2012 年、米原市上丹生)



図 22 絵屏風づくりから派生するその他の成果物。聞き書き解説冊子、パンフレット、紙芝居。この集落はこの他に「検定」まで作った。(2013 年、草津市矢倉)

た研究の中で採用される等、分野を越えた活用が広がっている。

絵葉書やコピーを配布して活用する。未だ実現していないが、絵解き会の席上で参加者から「地域の酒米を使って醸造した酒の瓶のラベルや、銀行の通帳の表紙画にしてはどうか」という提案が出されたこともある。絵図という形式がその活用について自由な発想を可能にしている。

12. 解釈の解放及び未完成性の評価

完成した絵図に描かれたたくさんの事物や場面のそれぞれの絵には、この場面からこのような順序で解釈せよと指示するような標識は付されていない。隠されたエピソードや流れはあり、四季の耕作のように自ずから流れが想定されるものがあるけれども、絵図に隠された構図やその意図はそれを仕組んだ者が説いて見せるまでは隠されており、前提知識なくはじめてそれを見る物にとって、絵図には様々な時代、様々な時期、様々な時間の様々な物や出来事が、一見無造作にまた無秩序に画面狭しと散りばめられている。だからこの絵図はどこから見始めてもよく、どこから語り始めても良い。しかも描かれた事象はどこから語り始めても、どこへもつながっていく。

他の絵画作品と同じく「ふるさと絵屏風」も、ひとたび絵画として成立したのちは、その画面から何を読み解くかというその解釈は見る者一人一人に委ねられ、解放される。

「百聞を一見に」して、地域の人びとにとっての最大公約数的な記憶をシンボリックに絵にしているが、同じ一つの場面から語り出されるのは、百人いれば百人分の、それ

それに固有の物語である。

プラネタリウムに映し出される星はその一つ一つに物語があるだけでなく、星と星とを結んで構成される星座にもまた固有の物語があるように、ふるさと絵屏風にも一つ一つの事物や場面にエピソードがあり、それら事物を結んで構成されるストーリーがある。そして誰もが自分なりの結び付け方で、自分なりのストーリーを語ることもできる。それを「メモリアリウム」と表現したこともある。

一方、絵画表現をとることで、全体のイメージをむしろ限定し固定してしまう恐れもある。絵図だけを捉えてそれを完成とみればその通りである。しかし「ふるさと絵屏風」はそれを見ながらの一人ひとりの語りと多系多発の人々の語り合いがあって始めて完結する。私としては、地域の暮らしと文化の継承に際して文字文章を含む言語表現だけではニアに単系的になりがちな説明と解釈から人びとを解放する絵画表現の力をより高く評価し期待している。それは地域で生じた事象すべてを網羅したものではなく、ある時点での選択判断の結果を「エイ、ヤッ」と一つにまとめたものであり、制作時点での「取りこぼし」の可能性はある。完成後も絵図はそれを見るたびに人々の新たなエピソードの想起と語りを触発する。「ふるさと絵屏風」の「活用」の中には、こうした「取りこぼし」や新たな語りをどのように掬い取り活かすかということも含まれる。

絵屏風の常設展示スペースに使われなくなった郵便ポストを設置し、その傍らに用紙を沿えて、新たに思い出したことがあればこれに記入して投函できるようにして掬い取ろうと考えている地域もある²¹⁾。「こうして新しい話が溜まっていくとしたら、また10年もしたら新しい絵屏風を描かないといけないな」「定期的に描き直し、新しく作るかしなければならないな」ということが多くの現場で話されているのを見れば「心象図法」は持続する未成熟性をどう担保するかということも重要である。

13. 「絵屏風親類」の形成

「ふるさと絵屏風」をめぐる最近の動きの中で興味深いのは、絵屏風制作に取り組んだ集落同士のネットワークが広がっていることである。絵図制作にあたっては新たに制作に取り掛かる集落が既存他地域の絵屏風の視察に訪れ、情報交換、意見交換し、ノウハウや心得の教授を受ける。ノウハウだけでなく、「カット画集」のやりとりをすることもある。共に絵屏風づくりに取り組む集落でありまちづくりの志向性に共通する部分がある集落同士なので、行き

来をするうちに日頃の交流も盛んになり、絵屏風制作以外のイベント等にも折にふれて行き来するようになる。そこでこのような関係を「絵屏風親類」と呼んでいる（図22）。

互いに行き来しながら新たな「ふるさと絵屏風」が完成するとその披露会には先輩集落の人びとが来賓として招かれ、先輩集落からは絵屏風を持って制作メンバーたちが祝福に駆け付け、多数の絵屏風が一堂に会してその場で同時にいくつもの絵解きが行われる。他地域との交流を通じて、絵解きなど回を重ねる毎に熟達して、型と様式を備えた一種の民俗芸能ようになってきている集落もある。後輩集落は先輩集落が編み出した絵図制作に関する工夫や絵解きのアイデアを受け継ぎ取り込みながら発展させていく。絵屏風をつくりその絵解きをするということが、自己増殖的に伝播し始めた感があり、こう言ってよければある種のカルチャーとしての性格を帯び始めている。



図23 集落同士の交流。「絵屏風親類」の間でノウハウの伝授や交流が行われている（草津市矢倉）

14. ふるさと絵屏風の効用

「ふるさと絵屏風」を用いた小学校での出前絵解き授業の記録ビデオの中で、子どもたちが「ふるさと絵屏風」の一部分を指さして「俺、ここの場面の話を聞いた！」「俺はここ！」とそれぞれが受け取った物語を交換し合っている場面がある²²⁾。それを語り部である地域の年寄りたちが笑顔で見つめている。地域の暮らしを次世代に伝える光景の一端が記録されているとも言えるのであるが、それは単なる知識の伝授ではない。

絵図制作の過程で年配のメンバーが、「なーんにもない」から「(生き延びるのに必要なものは) なんでもある」へと自ら暮らす地域への評価を反転させたように、ある子にとって登校時には単に「どぶ」だった小さな流れが、絵図

に触れ年寄りの話を聞いての下校時にはかけがえのない川としてその価値を一変させているかもしれない。それはきわめてささやかなことかもしれないが、このささやかな認知の変化は地域に関わるこの子の将来の行動の変化に繋がるかもしれぬ。子供たちの地域へのまなざしが変われば、彼らの行動も変わり、やがて地域の未来が変わる。それは、過去の地域の暮らしの記憶の次世代への伝承であるということ以上に、過去とつながり、過去を踏まえた地域の未来の創造の一步なのではないか。

地域の暮らしを次世代に伝えることに関して、絵図の効用はゆるやかに徐々に現れるものと思われる。ただ中には次のような「即効性」もあるようだ。

ある集落では、まちづくりグループのメンバーが中心となって集落内に「冒険遊び場」を開設・運営することになったのだが、それは「ふるさと絵屏風の制作がきっかけであった」という²³⁾。このグループが主導して制作した絵図には地域の様々な場所でたくさんの子供たちが遊んでいる様子が描かれているが、そのような絵の中の光景と現実・現在の地域に見られる光景の違いに改めて思い致すなかで、そうした事業に取り組む機運が育まれたのである。

また次のような「効能」を語る人もある。

「地域の歴史や人々の体験について、それを記録して後世に伝えなければと思って絵屏風づくりを始めた。それももちろん大切だったが、制作を進めながら、実はそれ以上に大切なことがあるのに気付いた。大の大人が一枚の絵図を描くためにああでもないこうでもないと言葉を語り合い、絵図が出来たらそれを見て泣いたり笑ったりしながら村のことを一生懸命語っている。それは、自分たちが何だかんだと言いながら、こんなにこの村のことが好きなのだ、ということを手で表わし、また形にしているということなのだ。それを傍で見ていた子供たちは、このおじさんお婆さんは何でこんなことにあのように必死になっているのか、今はわからないかもしれない。けれども、この子供たちが今の自分たちくらいの年齢になった時に、ああ、あの時あのおじさんやお婆さんは、こんな気持ちでいたのかなあ、と絵図を見ながら思い出すときがくるに違いない。そういうときに、私たちの気持ちが時間を超えてつながっていることを、子どもたちは体感してくれるのではないだろうか²⁴⁾」。

またある集落の制作メンバーは、制作段階も半ばに差し掛かったある時「はじめ二年もかけるなんて辛気臭い、さっさと描いてしまえば良いのに、と思っていたが、なぜそれ



図 24 『渋川・風景の記憶絵』制作：渋川・風景の記憶絵制作プロジェクト、2010年。草津駅前の一丁目一番地。急速に都市化が進み、人口も爆発的に増えた。田んぼの中の競馬場は今、大型商業施設。農事試験場で、最先端の農業技術の見本市が開かれている。神社では数百年の伝統行事「花踊り」。駆け抜けるSLと、中山道に並ぶ店、仕事する職人。池や川での魚つかみ、金勝山への薪取り、田んぼの四季も描かれて、まちと田園が一体となった地域のエネルギーがあふれている。(草津市渋川)

だけの時間をかけなければならないのかがようやく分かった²⁵⁾」と語った。

15. 過去を育てて未来を創る

地域の暮らしを次世代につなぐということの本意は、ただ地域の過去あるいは現状の暮らしを記録・保存し、あるいは復元してそれをそっくりそのまま未来へつなげることだけではなく、現在の視点から地域の過去と暮らしの履歴を見つめ直し位置付け直し、そのようにして先人のいとなみに学びながら、地域の歴史と文化に根差した未来を創り上げていくことにある。それを私は「過去を育てて未来を創るいとなみ」と提唱している。「ふるさと絵屏風」は、そのように「過去を育てて未来を創るいとなみ」の具体的な表現のひとつである。

ある集落の絵屏風完成披露会にあたり、制作グループの会長でもある集落の長老が次のような挨拶を寄せた。

「過去の先人の遺徳をしのび、現在を生きる南比良全住民が、いまここにお互いを讃え、ともに手を取り合っ、未来の南比良に絵屏風を捧げます。今まで、あたりまえのように過ごしてきた郷土に、琵琶湖の春夏秋冬に、比良の山川草木に、そして、人々に、この素晴らしい私たちのふるさとに対して、心から「ありがとう」を言いたいです²⁶⁾」。

地域の暮らしを次世代に伝えるというのは、未来創造的

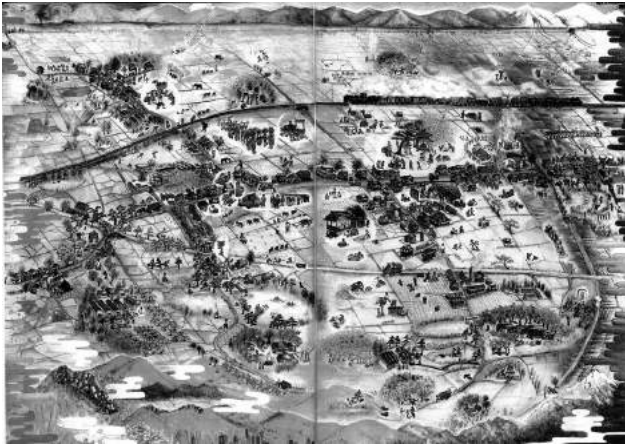


図25 『ふるさと矢倉風景の記憶絵』、2012年。田園の中を街道と車が走っている。遠くに琵琶湖、その向こうには、若いころ奉公に行った京都も描かれる。一軒一軒の様子も丁寧に描かれている。線路と街道を辿れば「渋川・風景の記憶絵」とつながる。矢倉と渋川に挟まれた街道沿いの草津地区でも2013年に絵屏風づくりが始まった。「オセロ効果」で道沿いに制作が伝播していく。

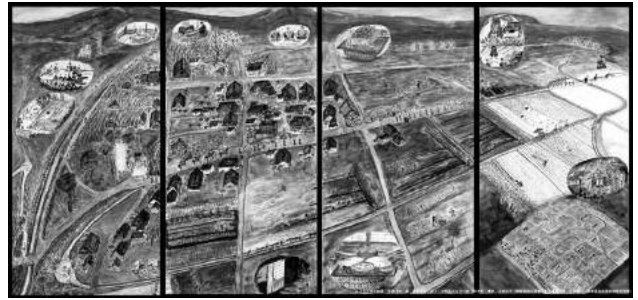


図26 『ふるさと沖田絵図』、2007年。制作：沖田条里語り部会。20軒余の小集落。右端下に条里制の全体像を表現。画面左端の八田川は天井川で、普段必要な時にはほとんど流れがないが、ひとたび台風や大雨に見舞われるとその様相は一変し、濁流が一気に流れ下り決壊・洪水の危機をもたらす。人々はこの川を「厄介川」と呼びながらも知恵を絞って向き合ってきた。皆が助け合って生きてきたことの証しに「並ぶ人びと」がたくさん描かれている。画面の端々には「神明講」や「タナカミさん」など四季の行事が描かれる。（高島市安曇川町沖田）

ないとなみである。「心象図法」はそのいとなみを、誰かにまかせるのではなく、一人ひとりみんなで作っていきという呼びかけである。

16. おわりに

地域の暮らしと文化を一定の手順に従って絵図という枠組みの中にまとめあげ、描いた絵図を活用する行為を通じて、そうした生活が既に失われたか、または失われつつある現状において、地域の人々が、地域における人と自然、人と人、人と文化とのつながりの物語や固有のコスモロジーを、改めて認識しなおしあるいは回復し、そこから未来を思い描いていく。「心象図法」はその意味で、いわゆる精神医療分野における「箱庭療法」にも似たいとなみであると言えるかもしれない(河合,1993)。様々な要因によって解体、あるいは「統合」を「失調」しつつある「在所」の物語を、箱庭ならぬ「ふるさと絵屏風」という道具立てによって鑑賞可能な形で一度外面化する。それを眺め味わいながら、共に未来につながる物語を紡ぎ出す。

主観に根ざし、個別具体の記述とその表現を重視し、絵図という形での「エイ、ヤッ」の統合を目指す手法が地域で選好されて、実践が展開している。私自身はその考案者であり提唱者でありながら、当事者として各地域での実践の渦中に飛び込んでいる。これまでの私はそれこそ「なぜそうなるかわからないが、現実クライアントが立ち直っていく」場面に立ちあう箱庭の実践者のような気持ちで地

域での制作の現場に立ち会ってきた。つまり私は、手法の客観的な観察者であり分析者であるというよりも、最前線の実況中継者であるに過ぎないということである。ただ現場で次々展開していくことを追いかけるばかりであった。

ここにきて、「心象図法」は、私自身の立会いや介入なしに、地域から地域へ、集落から集落へ、絵師から絵師へ伝播しつつ自己増殖的なあるいは独自の展開を始めている。そこで私はこの辺りで一度前線を離れ、今後は各方面の批判と協力を得て、様々な地域様々な分野に拡張する展開を比較衡量しながら、詳細な分析に取り組みたい。

補注

- 1) 本稿は滋賀大学環境総合研究センター第10回年次シンポジウム「滋賀の暮らしを次世代に伝える」での講演「思い出を育てて未来をつくるーふるさと絵屏風の実践とそのころー」の講演内容をもとに作成した。
- 2) 2004年、手法の開発初期段階に環境社会学会第29回セミナーで行った報告に対する指摘。「環境社会学会ニュース・レター」第35号(通巻40号)、2004年11月発行所収
- 3) 2013年、長浜市余呉町在住の山村文化伝承者太々野功氏への聞き取り。
- 4) 年不詳、彦根市八坂町老人クラブ有志への聞き取り。「水がタダでなくなった」という類の言い回しは他所でもしばしば聞く。

- 5) 田原総一郎、テレビ討論会での表現。
- 6) 滋賀県草津市渋川の『渋川・風景の記憶絵』や『矢倉・風景の記憶絵』等草津市内で制作されるものは「風景の記憶絵」と呼ばれる。一般の理解しやすさを考えて渋川の絵図制作の際にプロジェクトチームが考案した名称である。
- 7) 新潟県上越市宇津尾集落「宇津尾の歴史を残す会」が同市地域活動支援事業の採択を受け、同市を拠点とするNPO法人かみえちご山里ファン倶楽部の協力のもと行ったプロジェクト。
- 8) 草津市渋川「渋川・風景の記憶絵」制作プロジェクト等
- 9) 2004年、守山市幸津川での聞き取り。
- 10) 2007年、大津市南比良絵屏風づくりの会中村利男氏の言。
- 11) 大津市南比良ふるさと絵屏風づくりの会のメンバーの会話。
- 12) 草津市渋川、矢倉での例。集落間の公平性の観点からも、一つの字ではなく小学校区を範囲とした取り組みのほうが、制作初期段階からの学校との連携をより図りやすいようである。
- 13) 2007年、大津市南比良、前出の中村氏。
- 14) 2013年、草津市矢倉コミュニティセンター。
- 15) 2007年、長寿社会開発センター助成「思い出バンク整備と郷の語り部養成事業」。
- 16) 2013年、草津市矢倉。この地域は最も積極的に絵図の活用に取り組んでおり、他地域の活用の動きを牽引している。
- 17) 2012年、米原市上丹生。カルタは数百セットづくり、それを販売した売上をまちづくりグループ上丹生プロジェクトKの事業費の一部として活用している。
- 18) 2007年、高島市社会福祉協議会によるニッセイ財団助成「思い出を描いた絵図による認知症予防・対策事業—ふるさと絵屏風を用いた回想法で地域のまちづくり—」。
- 19) 2013年～、枚方市岡本町における環境省「ヒートアイランド適応策モデル事業」。
- 20) 2012年～、神奈川県葉山町での大和ハウス工業による「葉山の森プロジェクト」の一環として地元の2つの町会と共に実施。企業所有の約100万坪の山林の管理活用のあり方を考えるための初手の取り組みとして実施している。
- 21) 近江八幡市安土町老蘇。
- 22) 2005年、今津北小学校での出前絵解き授業の様態を記録したビデオのなかの一場面。
- 23) 2013年～、米原市上丹生。まちづくりグループ上丹生プロジェクトKによる取り組み。集落内の共有山林内に開設し、週末に子供たちに開放している。
- 24) 2008年、大津市南比良ふるさと絵屏風づくりの会、田中良成氏の言。
- 25) 2014年、近江八幡市安土町下豊浦、発言者は不詳。
- 26) 2008年、大津市南比良ふるさと絵屏風づくりの会会長中村正之氏のスピーチ。

参考文献

- 松沢哲郎, 2011, 『想像するちから—チンパンジーが教えてくれた人間の心』岩波書店.
- 上田洋平, 2013, 「住ムハ澄ムナリ—過去(思い出)を育てて未来を創る—」『M・O・H通信』42, 循環型社会システム研究所.
- 広井良典, 2009, 『コミュニティを問いなおす—つながり、都市、日本社会の未来—』筑摩書房.
- ヤーコプ・フォン・ユクスキュル, ゲオルク・クリサート(日高敏隆・野田保之訳) 1973, 『生物から見た世界』思索社.
- 川喜田二郎, 1986, 『KJ法—混沌をして語らしめる』中央公論社.
- 吉本哲郎, 2008, 『地元学をはじめよう』岩波書店.
- 河合隼雄, 1993, 『トポスの知—箱庭療法の世界』TBSブリタニカ.